

生活

メールはseikatsu@asahi.comへ

極薄 技 日本

「うすはり」のタンブラー。キャリア46年のガラス職人片桐久夫さん(62)は「薄さと実用性のぎりぎりの接点。飾らない分、ごまかしは効きません」＝東京都墨田区で



「Easy」シリーズのシャンパングラス。広がった口は飲みやすさを追求した角度だ＝埼玉県入間市で

一杯の飲みものをよりおいしく、気分よく楽しみたい。飲み心地を追求した極薄グラスが人気を呼んでいる。くちびるに当たる部分が1ミ以下という繊細さを支えるのは、日本の技。現代の住まいに合ったシンプルデザインは、日本のガラス産業に新しい風を吹き込もうとしている。(長沢美津子)

●出発は電球

口の厚みは約0.9ミ。白を基調とした店内に、軽くてつるんと透明な大小のグラスが整然と並び、六本木ヒルズにあるインテリアのセレクトショップ「AGITO」。海外ブランドも扱う店で、一番人気のグラスが、東京の下町で生まれたこの「うすはり」シリーズだ。30～50代のカップルが、自宅用に5～6個まとめて買っていく。「くちびるに触れた瞬間

くちびるに感じる味追って

はドキッとする薄さ。飲み物の味をストリートに感じられることが目標でした。そう話す社長の村松邦男さん(52)にとって、自分たちが使いたいという発想で作った初めての商品が「うすはり」だった。問屋主導でデザインや価格も指示通りやってきた。景気が傾き、限界を感じたのは15年ほど前になる。「何でもある世の中で、他にないのは職人の技術でした」と村松さん。底の部分も含め、グラス全体を薄くできたのは、電球吹きや伝統があったからこそ。4年前から本格的な生産を始め、じわじわ愛好者を増やしている。今年は昨年より5割注文が増えた。

●透明感生かし

高級イメージのクリスタルグラスを、「食器棚の飾りから食卓の真ん中にと考えた大手メーカーも、極薄グラスに挑戦している。HOYAクリスタルカンパニー(東京都新宿区)の「Easy」シリーズで、デザインを受け持ったのは建築家の鈴木エドワードさん。クリスタルという素材スキーをストリートで飲むためのグラスを登場させた。醸造者が試飲用に使うグラスをもとに、底にふくらみを持たせ、口は狭めてある。短めの脚を持つと、香りが鼻にまっすぐに立ちのぼってくる。国内メーカーとの共同開発で、試作に1年かけた。世界でこのだけの味をめざす。

●プロに聞く 飲み物と器の おいしい関係



しなどによって、形も大きさも異なる約30種類を使い分けている。「ジュースはエレガントに見えるよう脚付きのコブレットに。ティー

を動かかけたりにいく。呼び掛けたのは、消費者団体などで作る「遺伝子組み換え食品いらない!キャンペーン」。生協、市民団体など全国で約40団体が参加の方針を出している。国内ではGM作物の商業的栽培例はないが、品種開発の実験としてイネやトウモロコシ、ジャガイモなどが栽培されている。一方、規制する自治体の動きとしては、02年に山形県藤島町で条例が作られたほか、北海道、岩手県などでガイドライン作りが進む。運動では、各地にある農水省の研究機関、自治体の農業試験場、大学、民間企業などでのGM作物栽培の有無を監視、情報を共有し全国連携をめざす。問い合わせはキャンペーン事務局(電話03・5155・4756、ファクス03・5155・4767)。

海外の日本人留学生の日本へのUターン就職希望が増加している。リクルートが自社の就職情報提供サイト「リクナビ」に登録している海外留学生に就職意識を聞いたところ、そんな結果が出た。

「日本で働きたい」3割 留学生はUターン志向

リクルートが「就活」調査

勤務地に関する希望では「こだわらない」という海外留学生が55.5%で、過半数を占める状況は00年以降変わらぬが、「日本で働きたい」と希望する人は31.5%と前回の2年前の調査に比べ、約10%増加した。

リクナビの山邊昌太郎副編集長は「Uターン就職希望が増えたのは、9・11テロ以降、特に米国で労働ビザの取得が難しくなっていることも一因だろう」と分析。「だが、語学ができるという理由だけで、日本での就職が楽になるわけではない。物理的にも日本での就職活動が難しい海外留学生は、国内の学生以上に早めに情報を集めることが重要だ」と話している。

組み換え作物 みんなで監視 ネットワーク発足

遺伝子組み換え(GM)作物の栽培を監視する「GMウォッチ市民ネットワーク運動」が7月発足した。各地の現状を把握、栽培中止を求めたり自治体に栽培を規制する条例や指針作り

父の無念記念日

庭のモミジ葉の木漏れ日が食卓に上がりこみ、ダンスを始める暑い屋下がり。今年も終戦の日がやってくる。私の父の「無念記念日」でもある。



ひとこと

昭和18年、父はパブアニューギニアのブーゲンビル島で、マラリアを病んだ末に「餓死」という

こをうれしそうに口元へ運び……そのまま切れた父。みとった戦友が帰還後3年目に伝えてくれた無念の姿だ。「子どもを思うと、死んでも死にきれない。どうか、人様に後ろ指を指されるような人間だけ

にはなってくれるな」。友に託した私たちへの最後の言葉だ。形見のつとめ数本の髪の毛が入った白木の箱と、重しのように残された4人の子どもの抱えての母の戦後は、修羅場そのものであった。私の心象風景の中で戦

後は終わらない。父の最期を伝え聞いた、あの日の光景とともに止まっている。止めているのは、「戦争」への憎しみである。世界が混沌とする今、逆に鮮やかに浮かび上がってくる。父の無念を伝えることが、私の存在証明にほかならない。

岐阜県飛騨市 田中 和江 パート・68歳